名前のない犬

真辺よっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名前のない犬

【Ｎコード】
Ｎ８９９３Ｋ

【作者名】
真辺よっぴー

【あらすじ】
僕は犬だ。名前はまだない。
僕は空を自由に駆け抜ける翼が欲しい。
それは叶わぬ夢？
それとも……。

僕は犬だ。

名前はまだない。

？　**僕は犬だ**

僕は犬だ。名前はまだない。

昔、突き抜けるような青い空を見上げながら、

「鳥が高く飛ぶためには、翼がないとだめだ。
でも、広い空がないと翼があっても飛べない」

誰かが、言っていた気がする。

でも、僕にはまだ翼が生えてこない。

青い空は、僕の頭上に無限に広がっているのに、僕の背中には翼がない。

だから、その言葉の意味がわからない。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・to be continued

＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー
＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

？　白い犬

僕は犬だ。名前はまだない。

昔、雪のように白く、ふわりとした美しい翼を持った犬を見つめながら、

「そんなに美しい翼があれば、
さぞ高く、
透き通るような、
吸い込まれるような、
あの大空を自由に飛べるでしょうね。
でも、僕にはまだ翼が生えてこないのです。
広いあの空には、まだ行けないのです」

僕は、言った気がする。

彼は、僕を見据えると、バサリと大きな白い翼を広げて、

青い空の彼方へと消えていった。

翼を持った彼は、とても不思議そうな顔をしていた。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

？　タイセツナモノ

僕は犬だ。名前はまだない。

「大切なものを見つけることは難しいけど、
それを守り続けることはもっと難しい」

いつか、誰かから聞いた言葉だ。

単純な言葉だけど、

僕にはその言葉の意味がわからない。

タイセツナモノって、

どうして探さなきゃいけないのだろう？

どうして守らなきゃいけないのだろう？

僕は、僕の見えるもの、僕の聴こえるもの、

今の僕が、今一番覚えておきたいタイセツナモノ。

探さなくても、ここに、確かに在る。

でも、もしあの高くて広い空を飛ぶことが出来たなら、

もっとタイセツナモノを見つけることが出来るのだろうか。

翼はまだ、生えてこないけど。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

？　幻

僕は犬だ。名前はまだない。

「あの空を飛ぶことが簡単だとは思わない。
けれど、知っておきたいんだ。
あの空を自由に駆け抜けることを。
覚えておきたいんだ。
背中の翼を羽ばたかせる、僕の姿を。
それがたとえ叶わぬ願いだとしても、
永遠なる時間の中で、
願いが叶う一瞬の時間を与えてくれるなら、
僕は叶わぬ願いにすがりたいのです」

……それは朝が訪れる前に願う幻。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・to be continued

＊ー

？　遠い空

僕は犬だ。名前はまだない。

最近、朝が訪れる時間の感覚が早くなった。

あの空を眺めては、雲に流るる一筋の影を惜しみながら、

ただただ逃げ惑う太陽を探し求める。

……太陽はどこへ行ったのだろう？

入れ違いにひらりと風を身に纏えど、

まどろみに瞳奪われ、

届く光の彼方、今日を置き去りにする。

……今日はどこへ行ったのだろう？

風を身に纏った体で、自由に大地を駆け抜けようとしたけれど、

僕の足は重くて、重くて、自由に動かない。

……僕は、どこに行ったのだろう？

空が、空があんなにも遠くなっていく。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・to be continued

？　白い犬、再び

僕は犬だ。名前はまだない。

今日、雪のように白く、ふわりとした美しい翼を持った犬が、

再び僕の目の前に現れた。

「あなたの足は、とても小さいのですね。
この大地を駆け抜けることが出来ますか？
僕には翼がまだ生えてきません。
あの広い空には、行けないのでしょうか？
長くこの大地に足をつけすぎたのでしょうか？」

僕は、尋ねた。

「わたしに足は必要ないよ。
でも、君には足が必要なだけ。
ただ、それだけ」

彼は、僕にそう答えると、

少しだけよろめきながら、

ばさりと大きな白い翼を広げて、

再び、ゆっくりと青い空の彼方へと消えていった。

翼を持った彼は、とても寂しそうな顔をしていた。

最近はもう、僕は大地の上を走ることも出来なくなった。

僕は犬だ。

名前はまだない。

・・・ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

？　叶わぬ夢

僕は犬だ。名前はまだない。

悲しい思い出ほど記憶に残ってるのは何故なのだろう？

流れる雲が動いて、やがては空の果てに消えてゆくように、

僕の記憶も失われてしまうとしたら、

そこに残るものはただの無風の空と、空っぽの僕。

そこに漂うことなく、空を飛ぶことを諦めていたら、

何かを残せたのだろうか？

特別なものになろうとして背伸びをしてたら、

もっと空に近づくことが出来たのだろうか？

それとも、空に近づく必要はなかったのだろうか？

答えを知る術もなく、

時間だけが過ぎてゆく日々の中に埋もれて、

ただ一つ、僕が気付いたこと。思い出したこと。

明日が来ても、変わらずにこの広い大地があるという、

遠い遠い、はるか昔からの約束。

忘れていたのだろうか。

憶えていたのだろうか。

僕の、叶わぬ夢。

目を閉じれば浮かんでくる、あの白い翼。

僕は犬だ。

名前はいまだにない。

・・・ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

？　夢の空

僕は犬だ。名前はまだない。

雪のように白く、ふわりとした美しい翼を持った犬と、

僕は空を駆け抜けている夢を見た。

「僕はとうとう空を飛ぶことが出来ました。
でも、なぜでしょうか。
ちっとも嬉しくないのです。
こうして空を飛んでいても、
風は、僕に話しかけてはくれないのです。
空は、僕にタイセツナモノを残してはくれないのです。
翼が、生えてきていないからなのでしょうか？

それとも……」

僕は、夢の中で呟いた。

彼は、何も言わない。

ただただ無言のまま、僕と空を駆け抜けている。

僕は、

……。

名前は、もう、思い出せない。

. . .

to be continued

？　白い翼

彼は犬だ。名前は知らない。

雪のように白く、ふわりとした美しい翼を持った鳥は、

大地に降り立って、１匹の動かない犬を見つめていた。

「どうだい？
空は美しくはなかったろう？
わたしももうすぐ、
君がいたこの大地に降り立つよ。
永遠に」

鳥は、目を閉じながら呟いた。

「鳥が高く飛ぶためには、翼がないとだめだ。
でも、翼があっても、君がいる大地は広すぎるんだ。
だけど……」

鳥は、静かに、

そして、涙ぐんだ声で呟いた。

鳥は、ふらふらと大きな白い翼を広げて、

ゆっくりと、

ゆっくりと、青い空の彼方へと消えていった。

「……だけど、君は立派な白い翼を持っていたじゃないか」

動かない犬の前には、

白い翼が１つだけ残されていた。

彼は犬だ。

真っ白な、雪のように白い犬。

・・・ｅｎｄ

？　白い翼（後書き）

【あとがき】

このお話の冒頭部分は1年くらい前に作ってて、
そこからどう膨らませていこうかと考えていました。

きっかけは、
「絵本のようなお話を作りたい」
という考えが頭をよぎったことで、
その1年前に作成した冒頭を土台に、
大まかなお話を構成していきました。

他にも、以前投稿してたブログやノートから、
使えそうなフレーズやネタを探して、
組み込んだりもしてます。

そのため、ところどころ唐突な印象があるかもしれませんが、
そこは、まぁ、目をつむってムリくりつなぎ合わせてます。

テーマは、「出来ないことと決別する勇気」です。

人間って、「羨ましい」っていう、

憧れ、理想などの正のエネルギー、
嫉妬、恨みなどの負のエネルギー、
を持っていると思いますが、
これは人間だけが持つもので、
人間しか感じないものです。

その羨ましいと思う気持ちは、
自分が持ってるもので何かを成し遂げようとする気持ちを押し出すより、
他人が持ってるものを羨ましがることで、自分を低く見た方が楽だから、
自分の持たない綺麗なものに目を向けるようにと命令します。

自分がやろうとする延長上には、確かに他人が羨ましがるような結果があるというのに、
それをやろうとしない。
「あいつはいいなー」って思い続けてた方が、
自分をはるかに正当化できるからです。
「自分は出来ない奴だから」っていう風に。

でも、それは他人から見れば、もしくは自分を客観的に見れば、
「あの人（自分）は何やってんだろう……」
って思われる（思う）ことも多々あります。

かと言って、他人が持ってるものを手に入れたところで、
それは本当に自分が望んだものなのだろうか??

って自問自答することもあるはずです。

何かを手に入れるためには、
何かを犠牲にする必要はありますが、
最終的には『犠牲』も『獲得』もひとつなぎのものであって、
何かを生み出すためには、膨大な時間を犠牲にしなければなりません。

人間は毎日を生きてるだけで、
限られた『時間』という不可逆的なものを、
日々の中で犠牲にしているのです。

犬が翼を持てないなら、大地を走ればいい。
鳥が大地を走れないなら、空を羽ばたけばいい。

自然はそういう風に最初から約束されています。

人間だって、自分が出来ること、出来ないことは必ずあるわけで、
他人を羨ましいと思うことは当然だけど、
出来ないことを無理に願うよりは、
結局は自分が出来ることに目を向けて、ひたすら突き進んだ方が、
はるかに素晴らしいことだってあるのです。

背伸びすることなくマイペースに進んだ方が、
一番楽であって、近道だったってこともあるかもしれません。

ぼんやりと綺麗なものに目を向けて日常をおざなりにするよりは、
自分の中ではありふれているけど、そのありふれたものに目を向けて、
自分の日常に色を塗っていった方が俄然楽しくなるのではないでしょうか？？

あとがきなのに長くなりましたが、
今回の物語を要約すると、こんな感じのことが言いたかったのです。

テーマに沿って物語を作るって、大変ですが、
いろんなことを考えて世界を作り出すって言うのは、
とても楽しいです。

余談ですが、
最後の鳥さんの言葉、
「……だけど、君は立派な白い翼を持っていたじゃないか」
っていう部分。
ここのセリフをどうしようか、この物語で一番悩んだ部分です。
ありきたりにしようか、

それとも深い意味を持たせた回りくどい表現にしようか、
最終的には上記のセリフに落ち着いたわけですが、
他にも、
「……だけど、君には立派な足があったじゃないか」
っていうセリフも考えてました。
翼って表現してますが、実際は足なんですけどね。
でも、鳥からしてみれば、大地を自由に駆け回る『翼』ですよね。
そんなイメージを感じてもらえたらいいってことです。

以上、【名前のない犬】を読んでいただき、誠にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8993k/

名前のない犬

2010年10月13日20時14分発行